

時間と存在

細川亮一

発表の表題である「時間と存在」という言葉は、ハイデガー『存在と時間』第一部第三編「時間と存在」を指している。この未刊の第三編に関して、何が論じられることになっていったか、そして何故未完となったのか、等の問題がある。ここでは現行の『存在と時間』の最終節（第83節）から出発しよう。この節から第三編「時間と存在」へと移行することになっていたのだから。

最終節の表題は「現存在の実存論的-時間的分析論と、存在一般の意味への基礎的存在論的問い」である。この表題は『存在と時間』第一部の表題「時間性に向けて現存在を解釈することと、存在の問いの超越論的地平として時間を解明すること」に対応している。最終節は『存在と時間』のこれまでの歩みを振り返り、基本的な二つの問いを問うている。その問いに答えることが、第三編の課題となる。

(1)「存在論は存在論的に基礎づけられるのか、それとも存在論はそのためにも存在者的基礎を必要とするのか、いかなる存在者がこの基礎づけの機能を引き受けねばならないのか」(GA2, 576)。

(2)「一つの道が根源的時間から存在の意味へと通じているのだろうか。時間自身が存在の地平として露呈するのだろうか」(GA2, 577)。

この二つの問いがハイデガー独自の問いであることを、ハイデガーははっきり自覚していた。

(a)「存在論が存在者的にのみ基礎づけられると私は確信している。そして私以前の誰もこれまでにこのことを明確に見なかったし述べなかった、と私は思う。……」(一九二七年八月二〇日のレーヴィット宛の手紙)。

(b)「『存在と時間』において存在の意味への問いが哲学の歴史において初めて問いとしてことさらに立てられ展開されている」(GA40, 89)。

この二つの問いは、基礎的存在論という『存在と時間』を導く主導的理念に深く関わっている。基礎的存在論は現存在の分析論に求められる、という論点が、(1)において問題となっている。そして基礎的存在論の最終的な狙いは「存在一般の意味への基礎的存在論的問い」(GA2, 575)に答えることであるが、その課題が(2)において語られている。基礎的存在論の理念は、「現存在の分析論としての基礎的存在論」と「存在の意味への基礎的存在論的問い」という二つの論点を含んでいるが、それが最終節において(1)(2)として問われているのである。第三編「時間と存在」について考察することは、(1)(2)を主題とすることである。

(1)は「存在論の存在者的基礎」の問題であり、「存在論—神学」という形而上学の二重性の問題圏のうちにある。(1)を考えることは、『存在と時間』の書き換えという謎へ、そして

『存在と時間』の未完という問題へと導くだろう。『存在と時間』の書き換えと未完の問題は、体系構想の変容から、つまり「形而上学から基礎的存在論へ」と「基礎的存在論から形而上学へ」から理解できるだろう。

(2)は「存在の意味」の意味・次元を正確に捉えることを要求する。「存在者—存在—存在の意味（時間）」という三つの次元を区別すること、そして意味を「Woraufhin への企投」から理解することが必要である。「存在の意味への問い」の射程は、プラトンの善のアイデア、アリストテレスのプロス・ヘン、カントの超越論的哲学を含んでいる。

私にとって『存在と時間』の第三編「時間と存在」を考えることの意義は、我々を（少なくとも私を）西洋哲学へと解放することのうちにある。